淡々文集

前編

一

中村俊定文庫
文庫 18
263
1

中村俊定文庫

序

去之又去衆沙之門淡之又淡衆味之至深有四楊明之三楊一以德顯一以位彰名因實之賓實豈不符於名吾識三楊子淡之吾先知其名也三楊子者談諧之雄也其原出於

貞翁ヨリ乎傳ニ於晉子ヨリ楊蕃ニ永青スト
焉云フ是ノ所ノ著ハス俳文第千篇籠ニ於鯨
呑鯨鄒ヒ珠纓ル採テ毫ヲ咄々須刻ヲ
成ニ可レ謂ナリト巧矣可レ謂ナリト怪是ナリト集成テ請フ
序ヲ余ヤ也不敏ナリ於ニ俳ニ姑ク述テ其所見ヲ以
贈ル或曰子ハ儒雅ナリ士序スル俳ニ如何ニ余カ曰

呼アヽ因イヤシイ哉言也詩ニ不ヤ云ハ乎善ク戲ニ謔スレ兮
不レ為レ害アシヽト昔在三代之ノ稽ノ以レ戲ヲ參リ九鼎ノ
之象以レ戲ヲ謔ル偌大ノ禮器ノ於ニ是ツ且
天自ニ天地之外ニ觀レハ之ヲ茫々タル宇宙無シ
物トメ事トメ非トニ戲ニ也太白カ所謂ル女媧ニ戲シテ
黄土ニ搏マロメテ為スト云ニ愚ノ人ト良ニ然リ蓋ハ以ニ天地ハ

者一大劇場也告化者大劇主也
第物者生来浄且也死生得失哀
乗榮枯者演劇也蕩場歌関雅
俗分有世之腐儒無士行拆関孔
口談道活高自標異以為得禅法
自我観之抑亦惟戯如已無吾謂

之戯亦戯耳文字禅游戯三昧於
楊之文庶能如是観
寛保辛酉星夕集澮和舟撰

序

物茂卿譏和歌云。三十一字侏
離之言。不足道。蓋東人而華其
役者。固一家云耳。而伯陽嘗語予
曰。玉虎洞傷楓林美則美矣。
不如我猿大夫紅葉若鳴仗人

易感之為愈也。伯陽善養音
綜情在藻林。其品不出前而下。
而其云也如此。可謂知言者哉。夫
俳諧者古國風之一體。降而為今
之俳諧。亦已尚矣。如與人異。禁与
詞長。乃能鑄俗于雅。揉雅于俗。目

中無不可象之景。心曲無不可說
之情。上可以告
玉皇天將。亦可以諭牙儈居兒。亦
一種風流也。頑俗陽意中人。
亡論已段。令義而見之。不覺欣
然而頤而曰。勝讀窮措大詠學詩

矣。孰謂諧之道汙虖。三楊氏少
從東都寶晉子學諧。其煉句也。
去皮得骨。去骨得髓。奇如天吳
九首卷潮。一一噴玉。幻如術士歌
黃魚續黑巢。不見其縫。銳而可
畏。如老衲接人隻箭射倒麈中

聲。豔而可怜。如雛妓携其枝迎
歌眼語。變態可出。左右逢原。
其諧才哉。日晉子諧歌。海內無
雙。又能屬諧文。不著數棋集。
于世惜乎人亡梨存。寥寥乎無復
吵矣。三楊氏克繼其志。每與至。

輒修文辭以自樂。英華精彩。亦
諧之餘也。昔宋大尉袁淵采文
章仕人の笑者。次而彰之。名曰俳諧
集。蓋文章而俳諧寫者也。亦東人
假女字写男揚者。徒能学為其最。
而柔白集殿之。皆以源語枕艸為

藍本。而潤色之。未嘗少俳諧寫
者也。晉与楊。則俳諧而文章焉
者非邪。予冠經而佩史。爺宣尼
而娘迦文。迺文。迺詩。乃詩餘。乃
傳奇。乃和歌。乃俳諧。性靈攸發。
莫不染指。以有二子。未諧社為金

蒙久矣。今曷令茲編成請晃。
因筆お云授之
寛保辛酉秋九月
赤松山六花毛屋士郎

書通 上下略

此度文章三ツ并ニ序跋二ツ進ル法正答不希ニ
序ル事ハ尋ヲ以テ
一訛諧ニ文章ヲ事ハ極ニ和文章ヲ事又一
篇ニ云ル所ニ先ヲ以テ重ク物ヲ終実始乱始実終乱
始実終実全体四季叙神跋神ヲ事皆三遺記
ニ見ル事ヲ作リ也
一訛諧文章を集めたる板行の一書を見ヲ不能
愛ニ蒙三遺記ニ教もなく家伝行法第ニ書ス
家抱ニ不苦ル所段稿笑ヲ

一御傘之外題に俳之字又季吟増山の井四季の所に
俳之字何里又俳の字半ゝる所にあり給ふ事
一羅人物以百韻之席に桃青晋子没後準的依ヨル
とおく風流滅しとゝもの数十年とあり十年とあ
まハ光師ニ付ハ素香而已にて其意定へ数十年とハ
今日ここ到り門に俳諧消長ス事とあり今羅人時に新
意を立ツとあり席政を選者を参る事ハ所うしきを
一世を接るハ如何之事とあり門下之詞家と成る弟子
庭に替り所尋門る
一源氏ことゝ紫越句につかひ候に其理にあらしる事一句之

佳境を不捨百くなりすあり意本意を矢る様なり
事如何
一師道とても其ことを師道と云者多し師道が名高き
者なれハ弟子必上手と云事も有し聖人三千之弟
子語る所の四五人と申へし下手の師道にも上手有之の
あり先ハ如何し盗跖柳下恵のことさ肉牙を呑恐
も性によるへし上手の弟子に下手も多く見定へ
右六ケ条承ことく
返事　上下略
是非有て其是非「坊もなきと云事之家長学記ニ見へたり」跡競馬之所尋尾歴門答ト

誹諧文章を月雪花鳥日本之名にして学ぶ古
あるを拘留和文章といふなり拘諸祇とこれを少なり
日本之遺記に不拘ゝ之ち和漢心得名きとこれ不能の
不ほ和ゆ日小俗呼てきびしきことなるを是ハ能キをい
ごんとこれ其者皆誹諧とこれ事夢にも志ら姫人の云
事之過て改るに悔る事なかれとこれ語を年季之
奴僕も云ならハし口癖のやうに共のたとへ言をいふ迄
併誹諧文章とこれにハむさと俗語をつかふを不可能日
彼庭奥を面白をたひごんとこれ人を誹の字ハ人偏本
書くひなるへし俳の字を本く俳諧を不知日是ハおほ

けなくとくと事りにハ祇も志ぬ事也法傘の外能ハ本
屋之本ならや又塔山の井の季の所の俳乃字ハ季此委之通る
事なりあらこれ云季之又ハ青とて讀ム季俗語も所り又人偏
言偏等ハて本紛れる不も所る之此ハ尋ハ中奥より無量の
我等を費シ日事同痛クに本道之奥を傳へ日得を誹
中日人皆誹壺を不覚して瀬川の流れ論る之ハ雲法抄之
能目も偏ク本誤りたる不も有り且又此ハ文之席る事写之若
出之ハ日不言成教とてこれ思ひ日

加々拘ふそむ事てむうふ花の龍

誹諧にハクやうの事体なる句りやめ可関家日之

清しきへ

此御文を菱薫公の御自筆にて頒り給之今に所持致し

又

海ちとにんたりけれ如此もいふへし今の詠詣
の句をかくも有へしや猶の句をして頒り給之
我句ハ林夕君也御猶を　中院内府公御深筆なされ分り
誅に長田家の風雅の紀摂なるへし太夫にこそ来の四答
お止ムへし其角没テ後詠詣奥廃也事なるよし文字録
の人なるへし風風不ニ如我一と行ても寒號虫のごとく何とて詠

道の黒白ことのつまあたハしきにたらす菊によらしかし稲
負多ハ馬なりと定るとくひならん甚可笑十指十目也
云語ハ朝夕に吐て一篇くの事不案内にて志かも活機略斫の
筆勢異て海にこの如ハ
師道てもなきをおとしたる時代遠ひ数多ありけれども是
ホを雑務の儀あてハ様立をなしぬことのうるさき事とこれ
うしいたくとるへしさすが風雅の道にて名字を篇よく篇
ありしくることのあてく呵責にて及ましくて会佛無間禅天
魔といひもしそる日蓮ハ師道より上手にて
源氏を句にかりて聞くり氣やうざく嫌にて又ごとく

かゝらすのすゝにいひ出たりこれ〳〵のことなるこ不詳
心のしらるゝこのなり句にはいやなるこのあり文章に
行雲のすゝ僅馬ふなれなりよし源氏にも數多ありしを
長嘯もこれまれたり文章にハ源氏によりてハ天竺文章
とゝへし用ると拵るゝあり加いつたゝてりどめる拵まこ
とありなきおうめる是らのことなるハ繼語の文章ハ
いやに字へ繼ともおうまゝ長嘯びんのなきいふす半稱ん多ぬ
文章もまゝへしさやし法時ハおほみたほつかなれ源語
をけて其場を捕ひ作る書雲人をおとなるつかひ是
文章に半知らよし一字を以此色をけよをるてふをは

無ゝへし且又朽老手くしき拵ハ文章沒拵されを不弃
して一派のんゝ得に一冊となるし中身子も有へしや反
古になりてもまゝ通りこゝすゝてハに書肆築分外とゝ
老（丹波屋傳玄來之）日く是をもて不正病老字にむつかしく是ハ
此に志のあれを此南紀祇園先生赤府梁田先生ゝ叙
をもてに今遄（スミヤカ）に半て來りハ後とに故鶴焉を愛し雪
夜の月体家の窓より見ゆ況に入がとし黒白おのはなのうさら
ゝと明らかや是上三烏君ゝ跋頌り首尾調欲繼ゝ法
半ゝそ日此席ゝ盆山の書物相河源傳の餞り并ゝ乱
觴沖の朝寅暑れ越微細ゝ三書秘藏ゝ一書篇ゝ

の時皇法本写了を成る 光廣以魯山之銘に

石は石也意旨如何望事間不容髮咦

相用事武士之甲冑山伏之兜巾

知つさけて床の上にそついたまるこ千

世界九千八海

馬子判

見ゆて魯山の極意海ゆるやし

淡々文集巻第一

目録

一 飯のこと葉

二 拝領を謝す辞

三 歩蓴の説

四 堪西の坡に船載泛ふ

五 雑話盗人之禅

六 志波艸

七 楚八四日経渡

八 東賀へおくる

九　惠南律師稀年賀
十　春日筍哉物し人に酬ふ
十一　琵琶湖
十二　雜話六章
十三　犢鼻褌を贈辞
十四　珪珠旅宿へ贈る文
十五　紀陽分樹亭に於ふ
十六　竿状を送ることゝ
十七　病外并蜆賣
十八　冨天のおくに示教

第一　飯乃辞

眼に愛し耳をうたふ事。鼻うこめのし喉吻（ノンド）哉
そゝ支。茶に魚干酒に蓮に。やゝ却てきすの表
毎哉慕ひ。初音紫舟押れのれて。すくと叫ひ好
むと名つけ其品を畫し。今古風流干培（ツチカ）に主
（瞬七亭ハ大津ノ角上也）是皆心を書に境あり辞。寔に瞬七亭の地
從来飯を煮して至ツて好ます。されば百貫雑
（百貫ノ芋ハ徒然艸）芋かしら哉唫畫しなるハ。独うそふさ服うち
多くも意を煮せしめ。ゆるしハ時く物く言尚
にして異なり。此発し至て精く聖乃書なり

ふもけひ。味ひハ雲へハ葉云ある人れ言ふイみ。ん
あてなる鍛の音ふ。志ハふなニツ三ツ作うして阿寺
ろうた綻哉と。ひとり古地袖ヲ添へ。おなくとみつ
うら音して静ふ走り身ヲさすり。又姫メて心を
うふ喰るふ笑し。高安の女も此めしふ飯已とうた
されふふ尺ろちのふましきや。器捜うらす凝てら
をて。いひより山のやさ楊。飯顆山頂の夜雪風ふ
飛ひとし。四季折の聖菜ヲ煮て居ちゝ孫ち
うくヲ寄せ作らハ。粮ちて休して休せん。嗟めと
云ものを知らぬ人多し。一椀さハやゝふ二椀を許

高あの女 いせ物語

居士ハ四休 居士也

の法うまを拂ひ。三椀風のさくらをとゞめ。一句たち
まち好ミふまりをん。多めしなき飯うなと。首(カウベ)
を仰ぐ枕をうふして千とせ我睡る。瞬ヒ
艸堂ふ拂ん人ハ。齢八十八乃月む稀なら
ず。家清合んといふめしくおとの葉をならへ
示しをス

堅田ハ良茶ノ生ル地也

交りもこのまゝ稲の香添ミとり
半日拂ひ乃ヲ家廬ふしてたゞつわて述ミ
第二 拝領を謝ことゝ葉
大君風雅ふ翁。書洗く月を田毎れ新をむこへ。

清別業の花乃春ハ草に咲え。鳥の枝ひ奥
の行ひとの葉に清らなり。蒸てのすとも春
くして近し。遠きハ光無限のへてなれ秋清
鳴禄乃なりハしとそ。此日いか成日哉。家艸庵
に惠みぬ玉ふこの三ツ。雲花臺中千香哉合
みぞ治の橋姫なしなく袖を覆ひ。青苔日
不清して立田の暁を奪ふ。土もて出まやうな
家にもつうみ川うこの住さまひなるよし。
清くくむにれとしにくしけにあやし。一ツハ
甲斐きハ古里押うはなて。庵し先ねかくと

雲花ハ茶ノ一名

有さ毎けるく。鍛るの波を踏えて夕風をさ
きとて。名古首のさくらも今なり交干なり
うくる。雨の蹄のきくだ河けるにそ。猿くり春
と号て使賓に鍛をよへきのさくなる物にし。今
一ツハ志らきくしの良功もうなち哉うく斗り
に風乳のふ河りておとうなしく。誰允家玉の物
せいたんや。去乃に葉の白ひ心干言ひれハ鷓鴣
現と中河へり。梅くさにあく袖ハ秋の雲を哉雪。
炉火に乱ふいとく意しくそ待る

第三　愛蓴説

愛蓮ハ
愛蓮ヲ對スル語ニ

水の艸。陸の花を見る中ニ。世人ハ花の冥世なるを
言て捨ひて。唐の名を付ケ不を加へ。風雲をいとふ
事ゆゑ。外を割て樹を栽ゆる。菓好ル人のむつ色
くや思ハんずる枝あらば香風の遠きむ。ハ清し。蓴菜（子ヌナハ）
主泥より出てく。小倉境の胡日ニハたゝ見。夕陽ニ乱
す。君子をお祢くあはこのとなりて。亭ゝ菜亭乃
思ヲ袴ヲ置て。盃の数一盃潔茶

志ゆんさいの申給くハ葛乱玉のつら

かゝる横川の
そらにまあく
上略
弓氏ノ歌

我らニ不すこ来る志きのこも。横川ハたく不月哉や
とし。我こ我の関のさくらニ不そむく。渠もいてハ乱ゆき

葉のさゝ。初鴨を不待暁の夜を鶉するも亦むへなり

第四　城西の坡ヲ永を治ふ

日成ハ桃花いたりして語をなし。柳絲（ヲモムロ）に吹
て水波静なり。流に仁を永を治れハ梅
語つて風に布こ語ひ槃（カナ）に落きたり。天清く蓴
し。病蓴ニ子に従ひ行不を放（ホシイマヽ）にして。鴨にあら
ひ芦の心哉捜し。何くまと知くゆら祇申られ
すも。随見ハ筑る波よけ山にいたる。石に志るとうた
けして倩（ツラく）ありふヲ。禹の神を祈ヲ萬人の臂

廣茶ニ柏
文章の本
後ヲ以ケ也

を揺し。廣茶にしハの枝を並へてよくあを治

うふ。骨功の名ハ山よりも重くなす業ハ無ふを
里も軽し。此山絶頂に大抵へと毋ち名言し。
千松おむすひこゝ出る帆を運りぢとり常居
卯のむれ白ひを配里。孤峯要と成て彼の群
をそむ。固に一世表切なり。志ふも今安ク在ン
やおほや者のはめくみ浴うしねハ長く家哉
佛ふ平ニ下れ松ぎねひいと毋ふしむし。諸
侯の國くれ香を積る船を子ヲ以数ふ。
家くの下志ふく白く深遠く画て。布哉裁
行ふたさみ。志るし哉口ろち治世れ風流を

吹し。月に照り日をたみ。春をうれへて。そなれ
ふの價の雄生をゆらそふ。川口乃いきほひ。
大江田子のゝ名ハ朽もして百家今茶家の勢
ひ。三笠れ山下出し月ふもれしたみ作りし
ことあ乃何とらいへ深津ハ波さらへ久んや。増り
多る哉と哉れふみ隠元禅浴さハのむひし
どうや。宮ふいはうしきさ船し小兵。あやし
く艤を左ふとりてたる家へさしめ風情も。
花橋のむうしめきておうしくうさふ事も
あられ。婺婦ふゆらを。鳥色のきれふてか

しら我清くみ。綺き絹をまとひ。篷窓に
おとなひ篷窓に飛入。篷窓を出て、舩を掠(カスメ)
め舟に飛ふ。さざ遠ぐれ袖ふりと。孤鶴乃
東より西すなりもちやし。嗚呼何人ぞ。嘻々
吾是我志まり。志の孫ぬる淵妻永乃何さは
や。ちきりを誰に又川弁のうれやまおざめ是
世なれつる事と折すほうるれと。渠(カレ)をしくれ
忠やゆらん孝やハあ里なむ。敢てれとしめんや。
清く〳〵病弱日に益なき我をしみ。影りに
こゝろ已に慙て。悄〻肅然として恐しくて。

(久しやゝ垂尼　比丘尼也)

墓を撲にし筆おろかに。一唱の清さなきを志て
虎の郷汐に濡まりや枕乃花
乃に鶴海一千里に潮なく。れのつかう尾を成て
蛤ハ小児の生あに樓をやゆ。此奥誰に尺をたや。
酒をくみ魚に肴を投うち。蓋我ゆらひ吹て
かなあてゝ形りと。楊柳をも折。三子ハ弔ゝ京
に帰をとしむ。其日限り是。天きらくしく。弓
弦の新ハ武庫山を離し。我分(キリ)。夜にのあれハ
星の花鐘可数て扁舟錦城の光ちかし。是
時甲辰三月三日

(吹面不寒　楊柳風)

第五　雜話　盗人の禅

彼卓を業る酒家多し。或夜械来て窓を
称らふ蔵を誤て酒蔵に這入れと望ねる良
程悦ふ夜折柄し初雪枝くを埋ミ風も
鏡なりをくべく身こゞへその上ひざるく盗人幸
ふ杉をとつておこふさ雨打のこうき世のすも
命の上もつまれたてく覚くに沈砕となりて生
祈なく栖杉を枕可熟睡しかり宮可ゑる
日ふ移るき覚(リメ)て蔵より内を覗き見被ハ大蔵
不ふ健なるあら男二十余人頼めしを打くらひ

居なかれたり盗人出んとすまとも道なしお称
ぞ清ゐ可桶司(トウジ)とも蔵に来るへし命ハ一寸の目
なしいのやいのふと工夫を画し漸く心を定め
荒縄を以たち来ゆして手ころの丸さを捜しお
して腰ふさし尻をあるに限りこうけて蔵の戸
をぐらくぐらつまを遠慮なく打明かれ合
合ならび居る大勢の客をつき目もかうすまい一
文字可大手を伸りてよいくく忘いくくと夢
をあらくのふこのけて振ひてゐる男とも行をつゞ
これハ何ンじやなんぢや足ハとたつたつと見るだら

酒桶司也

まゝ盗人かも同ぶけすとるびまれ忍いくくと
廿日計静可手をかり中戸を振りいで話を
もまれして発去りける此時に一会信云の志ぞあ
も禅機に鋭急磨盤ハ空裏を走り換ふも
世盗人乃丈夫を必を見ましたん

ハ角ノ磨盤禅語也

中山ノ君ハ一杯の羊羹を以国を亡を家内ハ食
可啗入て盗人を亡を申あるされ諸藝
鋭念窮不可佳境ありと昔此に読く賛之

亡国タルハ司馬子期也戦國策

第六　真岐艸

再斯可之夫子季文子云語

再ヒ斯可也とハ日々人のうへの宝成へし一句を徐承

ウツヤ訟未見内自訟者也

まのゝ主神なし世ぞ入る山のうへ此月の前に咲出るむ
の俳。内に呼つゝ訟るの風色ならん。元文季の秋を
しめれ法雲よしに諸侍る。虫臂嗅洞あり杜府も
おはれ　世間ましく久しく神ことゝなりて例
有法者を静なる演説。名茶さうへ酒をむすひ
古を冷し新意を得ぞ。ゲゲ云事物に動くハ
腹薬を解ん其句ハ

坟ハ施て波を梯を薬乃月

むはまし世をつまりと
天ハ去らにや
みつかさの
久しき世ぞう
いとのそめてき

世の波乃うはさ詣りて花子鋭ともあまや。薬に
こゝりし九日の夕はうゝ夜の雛の苦しくも静

任長の作詠あり

に先てたゞ句形ゝ世かしやと尋称よらぬ。予云
ふ可也。此日の句ハ菊の月と云ふ人も稀平也
あらぬ世を下五文字を家に何ゝ人よ。れそらく十三
夜の月に似ひよせ。菓の字を以匂ひ世にふるたん。
後の月に菊也月とを結ひ出す一句。往昔もしら
つ。蕉翁にあらぬ。おとよく云ふ所さハ　「冨士の烟の
行来をかきりあらしと下出雅ハ各く奥に入ぬ
見て訪ふことにいふ作配あるやれをむきは杜府
来て几遠に眠らぬ。やまに向をめら雅布る。漸十三
日朝　「後有る菓子自表哉と。工東大方に熟して

冨士の烟
西行前ノ
又文字也
仍以下五文字
を云ふと云ふ
此ニ無ふあり
筆力の余情
あり

五文字にくらしむ。苦ミくて一指痛し。いまみ便二指
にはれ。こゝうらはれり何ンそ三思にまたらぬ。今時
連俳の境。六十一翁ありし先て開布り。世人云連俳此分
別とは只句の上にして軽な論なる。真味風流く
ハしく欲メ辨シト已忘言ヲ神を行ふ古語に出よりて。
五文字我蓋深くりとも。誹諧の句後選にあらぬ。
静におもふ。りしくハ重奇の達人有て、十三夜に菊を
むすひて一句我所さハ天下の舌を誠んと
「九ノ夜十ヲ日の当を世下にして一句を持て用ふ
我的古にあらんか。人々十三夜ハ心のふくとなり責

世間有真味
欲弁已忘
言陶渕明
句

九夜十日
九夜日ハ
十日新治
筑波を
連歌

らまゝ。たもおこしも形らさりけり。幸に十四夜到て
清光三秋の侍をはかりて　「照らうかなけいせいとりて
打変り。香きく拍なりして笑坐如花人と囲み残く
しまのなかにたくまに遊び帯書　「あそびども乃
清とひまいまるも。上達アときこゆ　禅と。ワのやうにこと
志れまし寄形るハ。先とあるふへうあり。光若はうと
恨しうけいせいとも不同もやり寄ゆけにとも不寄ゐ
民の酒の友のきこ　「まこことうれそこ主の那れ
いうてく人めも侘ぬや。すみよしの名後にて撰ひ方
人々に一句を残らせると

照らうかな
平家物語
のことなふ
謝公自有
東山妓金
屏笑坐如
花人　李白
あそびともと
云ふりみを
はたしの云
をなく
但古の演と
云ふよりて
此まてを
とれり
まさしとなこ
の
志のふ山又こと
ことの居もなし
やうまし詠ハ
人も下を志れ
意好

古人ニ就志らぬ一夜を秋乃月
後ノ右通家ノ孝言後ノ知ニ房輔仁親王十三夜の月をは
し先て翫ふといへと毋。十四夜の清光を今更ほうと
例の狂ハしく就くし里第ふ。頻りの日皇都山招就何かし
ようぞ就きと昌迪十三夜乃句へとく聞申
後なしと菊平光やし夜半の月
讀ふにおとろき字ゝに奇形り。志ちらく胸をこの里ひ誓
うにかろくと袖を志先に。連絡の境今日家れもふ不
にあらまり叶へ里ぞの時絶唱佳作を突くる。北野の神の
御教ともおもひすふまぬ何事就秋をて形うられもひ也

小弁ニよせ
たる奇人此
時意好六十
一日出来決
小弁ハ伊賀
国橘成忠ノ
娘中宮ニて
小弁里居の
時放蕩の和
もむ記あり

何事の秋をて
制ふ志らの
秋をてなうら

梓庫のれも
ひ久して書
我もらん
令無集に
八幡の光清の
所
あ投て至
帝ことも
又れもひ
こゝろて
手はけ
こゝろく
おとしろき
秋と云こゝろ

て書こふれしかれ筆にハはくしうたくともこれ無拙を
とれるひ侍る。其文の末平まで平八月十五夜石山
源氏の間にて戸出る所
死ぬて明日木の月に自然に有ひ哉
と云句を花のことも称嘆にしたる秋ありと云
木の月より
次戸ノ花の
引所
木ぬるたりとり来る月の新しれハ
心はくしの秋ハきに帝り
此の所にて一句とのひ帝んかし。源氏の間にて此
茶半有へいのしとりさまにある小山猿度も驚れ
帝家とそぶ書なしに句斗出てしたるに秋帝家也

きこえるまことに奇矣の人なりけり。次戸の巻に須
きこし堂帝秋と、来るハこの所に無ふ如るり世まと
式部一名乃子ト
云勅使ち家
女皮年繕に
あり
平　「為子ハいのある神なりけん感深も如さけも縁も
和スルも流れさるも此とのかなしとなり。昔今の人の心を
自ラ古何のしれ支も知る如るべし。去死ぬんと　「花に
祢かなくハむのりとにて去死なんなのきさらの日の望月の法二月十五日死ことと西行の歌
此所なり平めて望月秋法と上人れ佛出のみハたりとれ出て如の
かさるハむのりと昌迪とあり去死んと云詞ヲ出しうしこくのまくの雑筆文章の
いひ取へき
ら。碧浪金波三五初此夜清明玉ニモ ふ如祢のなく八月乃
と常に師の夜話アリ仍出て
碧浪金波　木れりと小死なせ十六て生涯のかゐなりめと木の月此間
三五初八月十五
夜陪亭子
院作て
菅淳茂
碧浪ノ句ハ
起句玉不如
結句七言律中略也
述て
結縁語曲流縁語結篇序題之。縁語の家道半時庵

篇序新曲流ハ家語書要とせらまあるとそ此五字當時誤語に日く有へし
他ハ不知也

時元文なし筑のとし九月仲旬

第七　楚八集四日經跋

言実皆居古今書名序　ふ居ハ龍語　叙を見て桃ハ其実皆不落其中句、其を孤策
ふ古人風雅之積桃家也　有下乞食之客ハ以此為活中

紹巴ハ一ー戴恩記出　斗之練上さ桃ハ称名院殿紹巴ハ乞食の事ありとて
此ゆるしなれるもありあるとそ為れるへ居を
さりけるのく書要成へしあふ事ハ其房ニ至に残り

乞食ノ字同ク古今書名序　こゝる乞食ハ是ハありうくそ筑行て紀之者乞食
末時庵

第八　東賀へ贈る

繋月繋日　文選　洛東賀。藥堂孫趣を半て贈里ものせよ。月を繋
日我繋きて貴家に来急なり。老愚畫（タチマチ）剃（ワ）法にあ
ひ。一室楼に向ひ亭に似た。図ありさるこの

周公覺

日高丈五清風生　各序全カ語　此呼へし日高き事丈五なれとも。あるし睡て斛
濃す也。藥皮門を和て分喫し。夜腹なることして清風
を生して去

第九　惠南律師稀年之賀

ちゝ誘はち我行の法元にて整りつゝ
久しく川うん君の事なれしと

伊勢ノ古志と云ふ所ニ、深ニ親を言乃
葉ニも世下ニそ。志きりの日葱の杖のこと遣りかゝし
侍りし月。玉は嵩の雲海さかの家は雲ニ庭ニ
うつしてそこてたちゝるを。漸一姉しの志とも。誅ニ
短夜なゐなからもくらけ引事多へや。無上の道
を欲て不思名利をのし給ふ恵律師の壽哉。
此とし八九の春秋二ツ斗も。さらしても見る屋きを
をみちの朝夕からやまかの白ひをこゝろ拾ひて。
たのはうらの高徳。頻り知るこそ。人想人志ひ。人
侍人ちかく。人なるれ不く。何年は年ても

五文字常云ゝ古語

矩を踰て我るや法の花衣
世ニ尸なる一閑人。歳を本来ニ法ゝつまかて五して。
四家の老人半時庵古れ我呈ス

第十　春日筍我鍋ひし人乃ことへ例ふ

発端恐ノ字ハ北山法皇ヨリ筍ト雅老ヲ女三ヘ殖らせのふを見れ頌

さらぐへなる家ハ思しかれと毎。北山なる寺我うたはらち
うれてり侍る人の林なりなるさうなとて。五六本六
七本嵩我ちの栢さ家ハ所ひ。雅老ハ深ハなから
志深うしは。塘出せ拾ひたれ古ことなとや。しく出
深ゝ我ちりまことに夏我魁なる所りさ毎。凡家
平鬱まぬる斗。志かく春雷の所くき渡りし

夜も。月にしめさるるすかくもいかめしに行くの牙
打掛へ綿綱乃襟我法うね。或ハ我人の簑を倒(サカ)
しかにきれし堂家糧ひ。穂先キ我勢ひハ乱を
のふりかゝりて繋我奪ふ乃いろゆり。卧てハ誰とり
立ちは角とり。折ねしあとりれるゝ。おみなほし
里可走り来りて。さいや。口うちとへぱされ出せ
めと。波さらくと引放(ナ)てハ。すくあやしけに光
里。いの成姫を生出んと思ふ事。世下にくらん
りとんひかも。いさてとゝもらふあるへんといふ事。
すと切散しく多くちに釣瓶と名つけ。糸りて繋

龍 筍ノ 一名 鈴牙 トモ云

いろなる姫 行方ハ知

れ恐に水我をり。さくち平汲とり。乱をなるへ
まいうさけれむすし。こけれ子の法ハ此まとも今たる
はかなしや。むさらしく剃とるハ波打ちて抜き
しあれハ。沖中川乃いと細きね我諍ふ。夜平ゑ
融をして七孔をあらへ。是我吹しめハ。[illegible]葉
ハ音ふ散りたるく。岸の枯葱かしを掛へ。考をつき。
精列お和ス時ハ。裏れ目頭く状夜ハ又明やをうらん。
法らく考姫にかしはきとらさる我。是うらあにく
ふるも。信に雪我中ゝ散ゆるゝ事我や。いかて無君
のおいさにをを待をして。穿ち信ふにて中しく

馬融笛ヲ 能ク吹

考姫ハ 父母也

らしめしけれど毎。後ハ又三月廿日にいさはらき
れとつま。竹胎の風流ハ我ゝんやと隠士乃歌平
閑人清く絶ハ我化まて謝ス

竹胎
竹ノ皮ヘ

廿一 琵琶湖

琵巴あり膝平揚て彈る人なし。柱(シウ)を斜ハ
らに波よふ虹ハ我ハ。柱の名を瀬田の橋と云
四絃一筋九十日。一弦深ふ日のあけほの春平還里。樹
四絃一筋九十日
四禾子ヲ四絃平擬ヘタリ
動れ草然里。氷筒ハ我化る日華三冬盡ニ事形ニ璞
を琢れ。雪も氷も鶯の春ハ諸巻ニされたる。梅ハ
枝いハ先しく。任俠ハ皆ひ併。花のハ志て北平南ニ

任俠
男伊達ヘ

肘を張里。玉乃蓋ハ新堀ハ怯ハ梵宇ハ牖ハ
らぬき。風を待守。かくなり(芳ナリ)ミ拘云影りに息吹キ。桃李の
だまりの我詹里裏の園の香。人ハ投る。かくハ平
美女あり。姫ニあらに采女にあらされた盃をとる。
眉ハ展(ノシ)風流愛すへし。獨ハ弱くまつて光ハ髮
ハ志ハ尾清く。ねもとろ見ハ里ニあり思ハ君ハ六田
より来ませけるゝ。独揺きていと心よく。子光の心
ハ我なるゝて。胡ハ春とたり鶯音と成り。九日と云
平裏直。卯の花ハ忘の夢ハ我あらひ。蓑洗の様
をとらふ。芽ハ輪乃ハ波秋風平ハ移る。楓葉萩ハ

ダマリモノ
桃李不言

孫もとろ
念ハ見ると
子光梅ノ一名
九日と云ハ
長能カ
ヲ見ル

楓葉荻花
三両声曲
琵琶行 楽天

此哉熟せん。三両声の曲をなさいまいり風心すく哀
わしく。雲に乱りて千まり日枝の空に即して暁れるや
元四時刻絃となり棲哉待あるべし。此琵琶の大井嵐山の
如みに余執。とらこし紅なんめくり濃らた六十余星何

百年三万
六千日 李白

至っ濤哉行りふ梳残りる人。欠百人三万六千度。誰
知此琵琶をと採て弾ん。前弾しまる人あり。紙おち

紫式アと
いえさるが
文法曲流れ

ある時り姫太鳥。後宜孝か書。上東門院女房。筆哉つり称
て撥をし。湘上哉抱て声よくうちふく

いつまでのし
桐壺発端

いつまれ御時みり女御更衣のあまたさぶらひ給ひける中ふ
と鹿哉飛しても一ツし二柳しをみなておほしゝ

おもひまれ
竹川ノまき
我ノ語

おもれたる世とてるひ為もた。猿へなうる人声ありさすく

ころ人ゐ
石山觀音也

てのる上光有水清く江千満。花を山陰にみえ付り。濁し
納メて霧の袋に隠し。雨の気をそよくめくりそく日月
見哉攬ひ。不二山のうへまり終

第十二 雑話 六章

一背去世人くし御家のは。白菓とうふ山破月中にま
小車を或大家より御知契れむりしおら行猿りそよ

朝きた初の
水夜えのみて
気をにれりる
ると覚き

とり。破月くの夜山ハ御家廃して後こちんありてわく
きくもし又ハ坂見斗掛待るあり。微に此廃た文太武
の守えらく常千和哥れ道哉降ひそのうへ

土御門内大臣
此哥の意書
成へし

是れ道筆の譜なく古人の工夫かはりなしへ和漢の
珠玉をひろひその道をきはめし人も多く世を継ふ
斗の能書となり給ふといへとも猶まことありて心さ
らせたまふ哉武哉ちめて雪とりれ花萩の明る哉
待うけあひて世々翁あるましきをおもひ続けてと
なりあって

年さはま流に八千し梅哉折りそへて
あとさにつけ如雪積らなしさ
御名家に忠平とよ於京なて古文年前の白
又あまた於ちしらふ越りふ乃月

ともかくり晴にあふより。野君内府公は御門弟と成り
給ふより至の一樓表れ一閣さそかく硯をそなへ奉
り給ふ鳥の聲青風の音水の聲みつのこ月ふさへ斗
れおとらひよりて。御師範への問答鳥の役八千里一置に
墨灰花飛をやくしま花枝をそふの流を八あらし。
学くよりくら給ひくてふり給み務めたまふを堂
とれはうらくおれ倚常なるに武門をは能つりさ
おとまより我をは光哉宮ても○の今ありなきかさ
らひたまふて実も稀なるよりてはうへはそこや
の山乃春は下泉あらはきかりあらえうりなりともれ

家教志ゝめ給ひきみよし玉は鎮神平相せい淵
うしは主因府公をとをちに責たまへともおあらんく
との御答も年まりなり。時到り時よろしかり清教
平やありけん以のうを給に神風の吹りて渡る日始
殺んこし。たゞくおとむきとも清ふさに奏聞深く
と御申ありて分みつゝ志ゝめ清免祈望て
抽しけれとてこそ之とて哥の数く御家に立ぬし
たまふらんこし。天機ちれくしく海上に家物の
りの物ゆへて整有ける半さ母墨の白ひとたよそ
の水ふきまは常の外にそこにハ数まへさかりんや

と院宣明らかなれハ内府公にも氣を蒙ならは眉
をくおほ布始くして和歌の併を心うてあらんもらん
なと仰志ゝさ懇くてうこひたまへ也ゆゝ如な
く御説有て草の紙のひ文字の姿を捨しても
可ありあらし。歌ハ聖斗院宣なりけれとそ此事
ゆゝハしけれとも清くみかくて内府公より野君
へありの中に仰入ら是なれハ。たゞくらにもあらて
こくありかくなりうしたるとそ傳年越
積三日越抜は日に棄すして詠奇し傳事の云
下ならきや。哥道の高き事今程お知らず

歌よむ筋をあきらかにして秀なる一筆を
疑ひ給ひ誅にいひ出屋幾御恵をなりと申給ひ
しとかやんのはおをむけて其人の業なる所相
なるへしを習れあらをの此もかゝ遂久しを
稽古名人且那の外世にあるまし是事やとれ
をひまふけるに頼ハとたりハ余りなるすかな
とて拳我振りをると笑談有りし
一節云常に坊主ともに空炬のきゆら我ワらせる
時四角に見事に割て四面に割屑志てゝに坊主
とも配當志ける事常なり或年形象の小性に

此木をれよと仰らせられた一大事の御用たしに
と御次に出四角平割て四面のまり屑微塵も散
らさに割たる木の側に案をて御前へ出し事れた
御機嫌を損して此うてかゝれたさのむされ仕方
にて仰ひ御くも坊主ともに割て指出るに加や
うの藁芥をとくにしてあり難なきおこの
をのなり坊主ともかしおくと割直せよとある時例の
大とく割屑我配當してうけたし是不たうり我
是とかれハ是にて仰ありて暫思惟したまひ船
の人我めしてかゝれとく遠ふ度ハと尋給ひかれ

え。伽医者ア多れハ坊を庭ハ屑我包屋ニ次くの
御用になりたへれとの設方なるん御形象を律義
ないゾ法に屑を見れ候事お次御用の心いまを到ら
さるとアに。笑を紛たまひ。形象我先して坊をとも
ハ屑我盗むまそあらん古人も竊(セツ)香と書屋侍
責るに不及ニ我ハあるりなりと御機嫌おとりにら
ひしかりなると。御奇の道心ニ此功を知ん
とおもひ給る
一郎君ニ御香阿弥勤志の府絵我相し給ひ御
用度くを仕付る。もとより長阿弥武場京師に清

らなり公武の御徳ちうくまゐる者ニて人情の高
低しられ来せられとなる事相し。町人平でも玉様の
高情者と世人を尊もやし家も御うらぬ位(イタリ)見者と
朝夕奪里なり。父武れ大将御在国の時ハ所をの御心平
けひ御出仕中なりぬ。有時御自慢の御をの好にて
砥我を作付箱のもやう花鳥れ白ひを府絵れ中に
れちの山並川の侍心へをえなる筆れ行うひ。御機嫌
影りにてくれて。勤志をめし出さ是その方今古く
名人と世に参らる人くおとりに感心のみなり性
御称并れくり言外字浅うしぬよりそ御意有加

くおもひ也て。勤たつ退く御家臣にむこうひ。唯今
の御定生く世くありうくく竊に袖に露志くて里志め
やあにしてそんしまりは是によつて私義も常く御
家くるゝハ毛頭疎かに存まらしたとは文花の度様化
此御家とは格別平志哉嗜まりて此度之御用も神以
利益にかゝりて不甲語ら御道具になり維持にと一筆く
に謂哉こゝ日也と御一陣へ申る時節に御家臣を換し
奥へ入らせたまひ御家臣を呼めし。唯々其方へ勤たつ
ゝ申さる一言きつくるゝ至極之条。唯今より出入哉ともむへ
し領分へも入れ置うしたと殘と申渡さへしとの御意也

御家臣に得かたき事なり作下される趣を長ゆ以ふ此
事にと申上らせられハ其方に得ぬとは此得かたき一言
也寧盗臣哉おく屋敷や硯箱ハいの斗の價にて申付
なるを役人共百字とりそのうへお射の價平何分一倍を
さへし黄金哉以とも此必一倍勤たつにをし作るへし
さ那くて其打角工夫平にくらる抱好捨り。道具にな
らす。集らハ大名くなまハりて益を貪里てより渡世と
も以ふへし。そのうへ妙手なれた用る方にも至く賢堂
哉屋し。御家の此度此細工にも神以利益にはかゝり
ぬと誓哉をてくいひ作るに益なきに得りハ有まし

何そ渠ホウ世益の理我あつらへ例に是事きくな
くんぞ我に心むさくて法うふに時なし。此度乃砥第に
て三年たつりも他の事相くて渡世段々なくて
ことなり神にし相好も無有へし。なくさみてもんよ
うらん利欲殊外と云道具も居身になりしに非系
の一言是に仍ても入我とあよと申付ると我仰らせ
ける。勘右つすこく京へ帰り心を法あり魂我刺(サス)たうり
のおもひなきとも是非なく。此波疎明へまつり行て此
時そ所人の言語とおもひまふくるハ何のやくにたゝぬ
事皆下早くる中にていひかちたもひかちなり。さこく

生活第目右堂たつりしたものハなしむ郎君ハ貴人
の貴なるものゝ御事相かうかく斗此右面とたもふ赤
面と云も中に懲まして我を家とたもふらそ額に
汗をおるゝなる。何ら御出入ありても内外不立と那
波へ粗々。三年たつり経て疎明御教免我ねてもの
とく勘右の法出入申ると我疎明ハ源氏知りにて郎君
へ御出ハ申ると其話ありける。源氏知りと其話有ル
中より定て此不我以疎明にならぬ申付りると味し
を字付る中そのすと暫くためらひ志のどもたすと
なくやみなり。同しくも疎明源氏知りなる也へ不定の

不我以なと清話もあれかしさ何らは白ひ有へし
そのかたりハ常平心ありけれとの也○文つかへ平
おさちておとひかけなきさいはいかりあるなし
ともおほすりしなと以へはまへてにぎかくしは平
よれへきなりかてすらひ給ふ我を人の以
はんやうよんえ給ふ事とて中ねにくむ右
はく本く不定
此頃まて貴人の怒りハかゝめ安かるへし況や風雅の
君也今まは程
一白居易ハ子をさはとて枕に殘る葉我うらむと

諷ふより白氏文集ハ我先をて見侍りける平仰る
事も如しいのなり今我事に有事やらんハ極めし
一今生被て行我津ふまとのハ恩好并謡乃作者と以ふ
事ハ嬰兒も常平口すさむ事なり此外上留り姉
中興の祖と云大雲説経かたりくてハ加賀掾と云しを
の掾功まては掾ヶ及ひ義太夫後筑後と云者也其末
流ともの卒章（ユリハリ）の工夫凡骨我離まて志かも本意と流
義を失ハさるなの掲焉（イヤシルシ）あきらかや
一芭蕉翁能中行我つふまへし先ハ蕉翁乃弟子と云
て翁をうりて本意我失ひ芭叟の正道我有て居を

賣利を得る事深まし適て才力有れ連中も芭蕉風
をかやうのものとおもひ涯(ナヅ)まるこそ是非なき境
也蕉翁今来らせみつから度を失ひ分死せし

第十三　犢鼻褌(トクビコン)を贈る辞

犢鼻褌 フントシ

比叡山の児れ久しく里居して帰らさりけれハ老
師乃もとより七月七日縞(シラキヌ)六尺をかなり贈ることて
をしさしき星へさて寄し犢鼻褌(フンドシ)を
目枝(ヒエ)よりお詠ひ遊乃志らす象

児ノ夏良暹記ニ見ヘタリ

と詠て挽乃細布を贈りけるとき。元咸かす思
ひ合せ象かし。日の本ハ中にも陰陽をよく口のてる

國民の常なり。陰に黒く下ハ白キとまちならハ
世以志るところを。羞子(シウ)おろそかゝ。惜哉文花
の一家。文花を破るの徒ならんかし。其れ包ミこれ
こそめくやさく法用ひこと。貴人を拝二重ちり
めんハ癢をせんと國絹まゐらせりも。さとし此詞
のはしをむすびたりの

さとし悟

第十四　陸珠旅宿へ贈る文

明夜即佛ニ急キにて御とりハ事。我念ニ此事
まて今朝も風なきの
京都に共に拝ひ共に雅波にいてる。万なく厳鴻

白酒初熟
山中歸　李白

声トよミと
訪する文曲
乱

ふまふて。雖上陳なく草庵の志ろ酒熟ぎるふ
間ぬく。吏里淡皇して阿波の国平れり。大和諸
や古き我ゐて皇都に出てく。ことより武陽に
御のことも出とを聞ふを直ひ事甚遠し。主人
ハんあるこころのわりむ事。契りハ心うくこ捨雨
もかりけれ。糟屋て今夜を阿けぬ誰とも為
のまんと。が乃為忠の事ぬもうらみぬ乃心我。翁お
とひ定て

君ハ脱君ハ日頼し　捨袷

志ゑくなりぬ事とも存ゐる良奥ア進ぬて氣

必ず兄合稼ぐ此ゑてゑ成ゐへうし

九月廿七日

なし　此ゑ事ハ桂八にあり　桂八
実体にハ誰くも存る　入ゐ所ゐ
てゑりしし

才十五　紀陽分樹亭に於ふ

本清ゑハ
王右軍ノ語
分樹能幸
故爰ニ有ル
仍爰句ニ
換稱ノ心有

分樹本ト清眞ヲ有るしに年有り誕詣の句及ひ
我詣る歌里れ日交に於ふ愛ゑとも如く捨るともな
起小屋の事本れ伴風を孕み雨を含む。北より来
まる風の白ひハ分　君恩有君恩風よりも美し

ワらの浦ハ
多くの人の
草乃海仲
にもへふも
藻塩うく
らし
後九条殿
乃詠

ヌナハナワガロ
乃吾庐
老杜カ句

南よりおのぼうら庶人の恵し和風吹来りて四時
程よくぞしをうくワらはらし風埒九条ミ内府ミ
すさみ玄母ひしおほくの人れ草のあと藻塩く
との葉ふあるしれこのめ海ふにして灯を夜とし
鉢家を掬して生涯無下なら姫風情。節を寄て
ゆるをいまゝ枕乃ナ吾庐としてまだ瞑。なりてさめ
飛ぎる乾鶏れ鶏ハなし来て乃蟬

才十六　竿秋を望る志ら無

鵜の家住ゝる世の一姫しハ蕉葉藜杖をうこう
し旅立書れ名称ゝ今り。瑞れ梧の芽まちうき

ハ羊ミ名
亀ミ代表ハ
二物ミ家ハ
家の風雅ノ
宝ゝ
基後ノ
ミ古記ヲ
云ん

やうに。香稲庵竿秋ハ初行郷ハ和斉ようし れに
うら山しな出うち家むかし心ハ出ら是ゆゑ亀の袋
と号けさふ古路陀を送る。是ハ古是硯うすやう草
居士ハ吉俊の中山おく れ細居六ツを隠し来る
ものゝ。松鶴の瀬を洗ひ家深後瀬ちし立れ破乃
香一二の谷れ夕陽妹脊山の喋。昔今打むまひ
てうれにおとし訪き長途なりんと申ぬくさめ
侍る

京へ寝て玉巻芦辺花の鵜

旹享保十六年春三月下旬空ラきらく山

明らうや

第十七　病臥　并蜆賣

発想文選風城ノ語

唯風ハ庶人の風なり。怒まハ松栢の下に舞ひ本我伐林莽を梢新し竹を吹切り。姫を割る篁（タカムラ）ふき切らまて。切口別風を含て自然に飄ふ。笛然とく岩打波に似たり。倩此情に遠くことより深なれ書とかむるにあらねば或ハ鞭にたゝうひ絃にいたまゝ承奉に似るへきやうなし。清々冷々窮巷に似るへきものなし。似せ家にものあるを庄八と云四十余りの大男。ほ程赤ゝ髮ハちゝてはくゝれ汐をはらはれ

庄八ハ蜆賣之

蓑を新しハ日の五ツの時を望ふ。芽庐の門外を遣承。其梁蓑ノ古事

春のこゝ平吼（ホヘ）新く新蓑を乾し

志くめエ　天ぐら　撰ッさかしらも

身も　おほきな　かしと　身と

余ゝ急なくある限り大青春のようなよぶ。得る系の一ふしあるくと字くに出れし

一升ハ幸を海より志てゝ取り

要子飢急の一句一升一生さしめなれ境界那うら苦なし系なし。勢ひ健（スコヤカ）にして世をはいさ乾波も輕くぷしこれ平まさ被る庄八哉。八て六十

又六ノ様ノ数さへ口を挑て苦このちがひに粗〻幸
れ事も尤も散り行キ消へるを添へ支朝夕の悩ミ大
王の風もしさて語あらハ陋窓に吹来て病を愈し
鞆を寧(ヤヌメ)よ。日の日れ日も多くに至しれ秋にそ
有き添ハ力れ支蝦(カヘル)骨なれみとぞ抱く啗(カンリ)齰とも
事く事とも愁(ナマジイ)に死生卒(シヘ)にして長月もいぬ先ア聖
も継く形り事り

大王ノ風又宋玉カ言之

力なれ蝦骨なきみくを促る系

撰しぬ身 「よしぬ髪 小キ こうしも

雖彼海促る系

「身も なんだ我海なんたれちの片隅にの寄り
と抱き添。さまてなを石に形りまて一松一栢玉の臺に

百川朝水ハ師ノ居士名ナリ比蘇寺朴道禅師ニ参ス

元文五季秋下

淡々百川朝水居士木槿窟に記之

才十八冥天に頒る示教

詩を徒長刀 和歌ハ刀 是奇を招差 誠語を
桐口也なしへて短刀を利遠く見れとなるや我を
一棧よく狗を定めん時ハ時ハ望て着て功所寄氏
ク館平て隠云を弑し荊軻を始望れ称をく
寄こと此時徒長刀ヨリさしなしを側へとる事
なるなし短刀を図平まをたまたこれ一ヶ条なる
ハなしこと此時秦王の佩とる劔我長きよりた

寫氏カ飯に隠公を弑左傳ニ出

荊軻カ事史記

ちに接事何ぞ其を要無且ら業嚢なくて刻
終るへし長起とて起すれば恐るへのしは。能ら清ら
如き心を定めり得ち藝道何ゾ何をかゝ云ふ事なし
唯見性なしら平其的を指すへしあしく用ゐ全
誑語ハ卑俗に居る事はやし嗜て言ふ事にふん
を是を神代の教へ儒朝の道を是むへ起如
里されて中興誑道に祖花咲社に貞徳季吟
芭蕉等其角引下て陋老翁て道統なり時今清
得全此蝶。押茶を以業を行ふ悲格并家説之
舊例式新古式本式及麋貶之今摺之の三ツ物

撰集笠岩古式之會ホ著く教ゟ上表能ら慎之
ちは遠慮の有之ゟ他門ゟより正統有へし不
知ら得ち不論ゟ凡余る程を教ゟなれ八。見ゟ執行
之外を有百姿なり序跋并撰者之事ゟ書
自花れりしてくゟ不少の病老文章も事ゟ貴
神之句是一句稱の穂ゟ如し芦の穂水かゝ
坐の句神尾花ゟ是て覚ゆれ母ゟ如し
うんゆゝ和ゟ竿秋へ几ヱ領を譲りゟ時を全て抜
のむ面の芦ゟ作りし此芦の穂を芦の芽ゟ
穂とゆりこるゆゝ祝しゟ也當乃。人来くゆゝと

もとを忘れしに一道乃清暁梅咲冬春夜雲
林のとゝちまえみ出るかとく来てかゝやき
栄へたまへ

本時尾

清文集畫第一終